

宗岡二中だより 5月号



令和7年5月1日

自ら学び考える生徒

学校教育目標：心豊かな優しい生徒

明るく元気な生徒

心開く。そして近づく。

校長 伊藤大輔

満開の桜も散りゆき、若葉萌える季節となりました。私の一日は正門付近で交わす「おはようございます」の挨拶で始まります。挨拶の大切さは昔から言われてきたことです。では、「なぜ」大切なのでしょうか。本号は、この素朴な疑問に向き合います。

挨拶は仏教の禅宗で使用されていた「一挨拶（いちあい いっさつ）」に起源があります。『挨拶』は軽く触れること、『拶』は強く触れることを意味します。そして禅宗において師匠と弟子が問答をし「悟り」の度合いを試すことを「挨拶」と言います。師匠が弟子にちょっと声をかけてみる。その返事の様子によって「悟り」の度合いを計ったのです。

実はこの禅問答は今も行われる修行の形態です。佐賀県は桂雲寺のご住職・夏秋尚孝（なつあき しょうこう）師は次のように書かれています。「今も修行道場では師匠と弟子が禅問答を行なっています。勿論（もちろん）、私も行ないました。はっきり言って師匠の前に行きたくないなあと思ったことは一度や二度ではありません。師匠の問いかけに生半可な答えをしてしまうとたちまち見透かされ、師匠から厳しい叱責が飛んできます。禅問答は師匠と弟子の真剣勝負なのです。問題を出す師匠も弟子を見極め、応えられるギリギリのレベルの問題を出し、それを精一杯の力で弟子が応える、こういう問答を繰り返して、師匠は弟子を深い悟りへと導くのです。」緊迫感が伝わる記述です。そして、状況や相手を見極め、その場に応じた言葉に精一杯答えることによって私たちが普段行う「挨拶」も禅問答に匹敵する修行になると、ご住職は述べておられます。

挨拶は人と関わることによって自分を育てる崇高

な営みと捉えることができそうです。挨拶の場面で交わされる言葉に注意を向けると、人間関係を円滑に保とうとする思いを汲むことができます。例えば、「おはようございます」を考えてみます。「お」と「ございます」は敬語です。相手を敬う言葉です。相手を立てつつ、民俗学者の柳田国男氏によると「朝早くから起きてご精を出し、偉いですね」というほめ言葉だそうです。朝からお互いをほめ、敬意を払うことで気持ちのいい一日を始めようとしているのです。あるいは「こんにちは」とは、「今日は、いい天気ですね」などといった言葉の「今日は」だけが残ри、「挨拶」として定着したものだそうです。また、別れるときに言う「さようなら」は「左様ならば、本日はこれにてお暇（いとま）いたします」などの言葉の冒頭が残り、定着したものだそうです。何気なく発する挨拶の言葉に互いの存在を認め合う機能が隠れていることに気付きませんか。

挨拶をする人は心を開き、相手に近付こうとする人です。「私」発信で、「ここにいるよ」と相手に伝え「ここにいるね」と相手が心を開くことを期待しつつ、誰かとの関わりを始める人です。この人は言葉の本質をわきまえています。なぜなら、人は誰かと繋がるために言葉を使うからです。言葉を学ぶ理由もここに 있습니다。新たな言葉を学ぶことも、言葉の使い方を学ぶことも、言葉を使って学ぶことも人と繋がるための重要な手段です。たった一人との繋がりが縁を広げ、ひいては自分を大きく育てるきっかけとなることがあります。挨拶はその入り口です。

幼い頃に感じた清々しさを思い起こし、自然で明るい挨拶の実践を一緒に広げてみませんか。